

Safety Report

セーフティルポ 幼児の保護者

全国各地で活用が進む幼児の保護者向けプログラム

Honda は今年 8 月に完成した幼児の保護者向けプログラム (P6 参照) を全国各地の交通安全指導者に提供している。

10月5日には大分県宇佐市の豊川こども園、11月1日には長野県松本市の松本光明幼稚園で園児の保護者を対象にした交通安全教室が実施され、このプログラムが活用された。

大分県宇佐市の事例

豊川こども園で指導を担当したのは、大分県交通安全協会宇佐支部交通指導員の衛藤恭子さん。「宇佐市内にある中学校の7校中4校は、自転車通学する生徒にヘルメットの着用を義務づけていません。子どもが小さいうちから保護者にヘルメットの重要性を認識してもらうことで、中学生のヘルメット着用を推進したいと考えています。Hondaのプログラムは保護者の意識を変えるのに役立つと感じ、使ってみようと思いました」と衛藤さんは話す。

交通安全教室では、子どもの「自転車」をテーマにした本編映像が使われた。一人のお母さんは子どもにヘルメットをかぶせ、一緒に公園の中で自転車に乗れるようになるための練習をする。一方、もう一人のお母さんは子どもにヘルメットをかぶせず、家の前の道路で乗せてしまう。そして、お母さんが目を離れた時に自転車に乗っている子どもが転倒したところで映像は終わる。衛藤さんは保護者に「皆さんは、お子様が自転車の練習をする時にヘルメットをかぶせていますか」と問いかけた後、「ヘルメッ

トを着用していないと、転倒した際に頭部に大きなダメージを受けます。自転車に乗る時はヘルメットを着用しないと自分の命は守れないことを、お子様に繰り返し伝えてください」と訴えた。このほか、「歩き方」をテーマにした本編映像を見せ、「歩行者用の信号機が青の点滅になったら、急いでも焦らずに、次の青まで待つという模範を大人が示すことが大切です」とアドバイスした。

長野県松本市の事例

松本光明幼稚園で指導を担当したのは、松本市交通安全指導員の深澤靖恵さんと佐藤美紀さん。「Hondaのプログラムには私たちが保護者の方々に伝えたい内容が網羅されているので、取り入れました。わかりやすい映像により、大人に交通ルールを守ることの重要性を理解していただくことができます」と二人は話す。

同園の保護者のほとんどがクルマで子どもを送迎していることから、今回は「自動車」をテーマにした本編映像を選んだ。駐車場でお母さんが他の人との会話に気をとられて子どもから目を離すと、子どもは遊んでいるうちに駐車場に入ってきたクルマの前に飛び出して事故に遭ってしまうという内容。映像が終わると、自分に思い当たることがないか、こうした事故を防ぐために自分ならどうするか、保護者に考えてもらう。長野県内でも最近、保育園の駐車場で同様の事故が起きていることから、これは他人事ではないと深澤さんは注意を促す。そし



豊川こども園の交通安全教室では「自転車」と「歩き方」をテーマにした本編映像が使われた

て、駐車場などで子どもだけを先に降ろさないこと、駐車場では必ず手をつなぐことを強調した。

また、子どもが小学校入学を控えている保護者も多いことから、プログラムの資料編に収録されている事故データを使って、歩行中の交通事故死傷者数を年齢別にみると、小学1、2年生にあたる7歳児がピークであることを示す。「小学1年生は一人で歩くことに慣れていませんから、小学校入学までに各家庭で交通安全教育をしっかり行ってほしいと思います。そのためにも小学校への通学路を何度か親子で歩いて、どこが危険箇所か、どのように安全確認をするのか、お子様と一緒に確認してください」と深澤さんは呼びかけた。

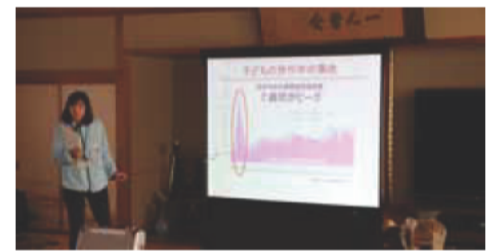
交通安全教室を受講した保護者の声(下記参照)からも、保護者一人ひとりの安全意識を高めていくことが家庭における交通安全教育の充実につながるといえるだろう。



本編映像が終わった後、保護者に問いかける大分県交通安全協会宇佐支部交通指導員の衛藤恭子さん



松本光明幼稚園の交通安全教室で使用された「自動車」映像で子どもから目を離してしまうシーン



資料集の事故データを使うことで保護者の納得性も高まる



◆豊川こども園と松本光明幼稚園で交通安全教室を受講した保護者の声◆

- ・対照的な保護者を比較するという映像が、わかりやすいと感じました。
- ・子どもと一緒に散歩する時は、交通ルールを守ること意識したい。
- ・小学校入学前に、通学路を子どもと一緒に歩いてみようと思いました。
- ・自転車に乗る時に、ヘルメットをかぶせることの大切さがよくわかりました。
- ・映像の中の悪い例を見て、自分にも思い当たる部分があったので気を付けようと思いました。
- ・お母さんが子どもと手をつないでクルマに乗せたり降ろしたりしているシーンが印象に残っているので、参考にしたい。



松本市交通安全指導員の佐藤美紀さん(左)と深澤靖恵さん(右)

Close Up

クローズアップ 交通教育センター

体験を通じて、安全な車間距離(時間)のとり方を理解してもらう

鈴鹿サーキット交通教育センターは、香川県坂出市にあるHondaの安全運転研修施設「Honda セーフティトレーニングセンター四国」を活用し、中国・四国地方の企業・団体のドライバーを対象にした研修を定期的に開催している。

9月13日に開催された安全運転研修には、伊方サービス(株)と四電ビジネス(株)の2社から6名が参加。実技として急制動、

車間距離検証などが行われた。

急制動では30km/h、40km/hで直線コースを走行し、目標となるパイロンを通過したら急ブレーキをかけて止まるというもの。ABS(アンチロック・ブレーキ・システム)が作動した時のクルマの挙動を体験し、各速度での制動距離を確認する。車間距離検証では、同じ速度で走行中に正面に設置した信号を点灯させ、受講者はそれを



正面の信号点灯を確認してから急ブレーキをかけて止まり、受講者の停止距離を測定

確認してから急ブレーキをかける。そして、この時の停止距離と先ほどの制動距離から空走距離を導き出し、安全な車間距離のとり方を考えてもらう。「車間(安全空間)を確認するために、車間を時間で計る方法があります。車間を時間で計ることによって、速度の増減に応じて車間も変化します。自分が前車に追突しないだけでなく、後続車からも追突されない穏やかなブレーキをか



クルマを白線にピッタリ合わせることで車両感覚を身につけるトレーニングも行われた

けるために、道路環境や運転目的に応じた適切な車間を時間でとることをおすすめします」とインストラクターがアドバイスした。受講者の渡辺勲数さんは「信号の点灯に気づいてから止まるまで、自分が思っている以上に距離がかかっていることがわかりました。今後は適切な車間時間をもって事故防止を心がけようと思います」と感想を語った。